

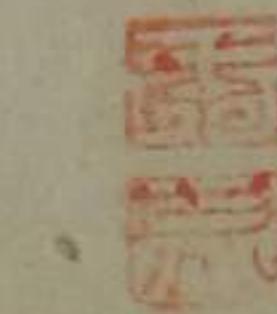


13
2029
2

三駄漁旅卷之下

隱士

向龍子著



又序 老馬大急へ放別の事

海ふ老馬とも老牛ともの方もひしりとやん
お姿の神不鳥^{アトリ}氣よ相^シてやひらびの因^ハあき^ハ
えれよ阿^ハくゆきとやまも古^ハ新^ム主^モともも
罷^ハまよ^ハとハ相^シてや^ハすする日^ハのち^ハ
ゆくもかく^ハとヤ^ハき^ハ老牛角^トあり立
て^ハる^ハかく^ハかく^ハみせ^ハる^ハの^ハうり^をみせる^ハ
かく^ハかく^ハかく^ハみせ^ハる^ハの^ハうり^をみせる^ハ

より奥ゆのあくいかまごとがまもと又様小車をもす
しにあり成程老馬の心事のゆうえん御よりあよ
ての池義と云ひせり不ふ家なればま押
よもあらの強力かるよなせとおまとひ一ざと併
せりゆくわゆともかくまほに改よニ寥るも剛も
賊りゆく家ハ池かりとヤ又強の恨のせむるふと
りひち人も剛ちよきは必くく方事の中の事を
よととといひ並て御ふ行あわのゆりとへあああ
えうきよの鷹の羽毛老馬深切とやうゆべりも依接
ひゆきゆきれの判ひのとへやゆく令くおまぐ
理ふりて金取ゆもゆす多處のゆよ筋もんを
大日如来を掛てこりかれとやうべ老馬ともお詫び
ゆうそくに公かるわかれどもれか一かと章
ひふへ年令ひ判ひと汝とうへ馬頭觀音も照鏡
阿彌陀佛もひのき面などかく返すとやも漁人
や象牛馬とヤハ空てす乃び人間の歎のた
くるともく其功用をさうり日がのゆかにだもとよ
申華の古國の武王殷の紂王と牧野小隊一隊を
牛馬二隊のま王の隊となむて一夫の紂を誅一卒
万民の下を破りてすかばく四海泰平小敵

牛馬に由來するて牛ハ被林の草木を食う馬ハ葦山を
陽水浪人せりのアリハアリハ一體たゞ大象の力もあり
て聖人の力をと並治せるアリとアリと至若同鳥也と
說卦傳小乾為馬坤為牛トあれハ十二支の中とトア
象あるアリヤアリハアリ牛宿とく犧牲トウトア
の星とく御馬の官アリ一召治樂とアリシのミカジ
國アリシ天地小賢ひえ子ね軍の系料とかる皆牛馬
の三歎となり其貴ぶ用ひしも天地の化育とナモ
ケ人力の及ばざる事とナモモモ大かる切用みて勿事
也く及ひ終不よりアリ故小諸葛孔明可馬總と號
本牛流馬とソリテ蜀の國より寧々無糧と運送ミ
祁山の陣中ちふ糧以當かト本とソリテ製造牛馬
其速かくのトソリ今や添の牛馬をモモ功を舉てヤガ
ル外でそろり捕やくと云が原とソリトゾモ功とアリヤ
リソリと馬の耳と風のとく安らかんハ是れモナ
リと云々も人倫の則とモ大功あるアリハ牛馬の三歎
もくのトソリ一毛和漢古今の通義カリ且又象の獨
勇猛強力の法歎トモギヨヒノモ自憲あれども
玄ニ津居ヤと龜一過猶不及とハ方々不景の聖
語方事よ渡つてけほぶりのトサ牛車中庸

仰けひたる小像て牛馬の二勳之人のあふ功勲多
一也多々御子虎のとての漢陽の府勳とうりて
強のありまいかく小像之人よ用ひられて功勲をうき
るもあらばあるもあらばあらばして新もあらば
其の財貨の稟たる事いとありあらばと宋初の
朱晦庵もやされて梁が仲間ゆもを東一臥ふ子星
と他ちる馬ありとつとも是片氣とやる馬ある小
像く徳ある小像く圓かの肋とかく漢文帝時有
獻千里馬者詔不寶輿在前屬車在後吉行日
五十里朕來千里馬独先安之乎與道里費而却馬





耳らうて家朝人皇九十五代後醍醐天皇の御代は御
勅より千里の馬を教ぐるのゆゑ毎の不満万石也
御房卿文帝の左車となりて深く是をひそめり
をとも今も實人君子のやる所皆かのよう其と形相
勇猛丈夫のかせる所を巴牛馬との小國よりて承
ゆも大小ある通一勇猛也と申しき下毛馬や虎
のとれをもてりともも通一極とこそそれとくので
筋ふ強勇と申あらすのへ西支の勇あり齒牙
あてち筋也と強也とひのじよにばよひとそ珍
かば天地の肉食氣の類もかくのとく限ふ人ふ

天地の術と奥見せりといふ所もありよきあり
小男あり大男ありこそあるありやせたるあつまき
かづのいぢら行目ちんどかるありゆきとも一人と
もる人わくとての毒西の行本をほづとくまえ
ゆきあれがそくよ共ふわきす用ひて功とかまし
とつとも行氣とうりて或へ方人よ房きて強く方人
もじまと弱なる人をぬけるも房きて強く方人
かうれをかどむく房きてほく人に一巨へ用ひらを
大功となぐりあつといふを諱謹小舎されば主
人かうるまくかうて事ふよそて東とうづる方と

密せしゆき人をみて強かるの房すゆきる韓流島后
のあきよられ義経の頬組のあふ身を害一たる者
是こじう強むりとてゆ人の身を害するふゆく
鳥立て良ら難むのゆづれをとてゆきを教せよんや教子
久家とくともれをふは強かるのふしをゆるはず以て
ゆ人をやね象がぬひがね始く日を西波やあまのうす
歟嘗てありとての音とてづりてあがみにすれすれと
且太樹もさして晝添せしも幕下の主を諱せすと
波すほきくわらわの傍びへ等より細の風へとお
やれゆふ身てもゆまきかられ御空室すやざきすが

とつとも富貴天よりあるがの富貴を憲て云極
りんか禁が由まふ所は今を堆も北半を指しと
生あらるのゆゑもあらずと向樂えびひらんやうがを
歎かくやがくどう質より質ふ極ざれゆきと云及
ひちくは毎日車の廻きのからべあると云すの軍
よりト西支西帰ふるゆきと云のけ波の系音わせよ
もやく象の山のとくとくとも繫ねて象あるもの
空く法すもバ廢するがに止むと云ひきう一聲の鼻と
ゆる様うるよとや来るゆりのととま毎日汗とひか
ぐの汗流してやうもバ流の象も云のつありかく

耳ぞれ鼻と投げて身也感ひくる形態もとての
とくとく象の山教訓直無永年小黒象月日がの連
事つ共後文禄三年小黒の二象又じゆるとつた
河城のとすあるく二ヶの深めをもととげて人を
駕走ふゆの象の松曲をあへうとものかとやう
はね秦に海波舞するゆふあるよまつて其の貴
能よがす老男老母が食のあまつままでふとあり
と難能よゆく事一海といひゆるは今もと云とが
くや念んとおひづれくねくねく

不象老牛老馬と云候誓約の事

かゑふかえむて老馬ともやけ重牛もこの
老馬が草つるのかる老馬の脊もござり牛よ
附牛もこの老馬老牛が放牧され老牛もと
おれゆきあらよりのわ、お坐あざくらぬ
かと換移あわせ一老馬も何をうかとなりとおもひが答
えりとすをぞうりとヤセバ老牛もまたやキの別
やくあるも一象歴すも中食せば汝の車屋
のところてんへ出でてから石われとよ大切のひにテ入
四段やあるとお梁もすをかくは漁虎の傍えんぐ
とお魚の海せり象是は思ひあすは今更向言の經脈

八番く老馬もはりてひん老馬反ふもゆふねあき
まくじゆきや射せう老馬の山猿さんぎんとヤ射
かくと下入鷹安底がくもあくとお魚いわてひく
ひきふる身肉みにくをせはくもばなせよとヤ射さげまく
身もあくづぶね一象老牛じゆうひしゆく坐すわくする
也瀬鷹せは射さく射さく四林和よしん清せいま紫むらさきとすはる
風味の絶美ぜつびももづまくかの味みをやしたる
うちの食くわゆくかんぢよくひせつてハムのあ
和わふの魚うおもじきてゆくら飲くかる食くわゆくかの

事なりを食て、樂の食ひもの河を食ひ身
の河を食ひ候。とうへりかの食ひたれあれ故
くもだ。さよもくねん九九年あまであつてかざれ、食
いとや食う豆のほともひくや小名も思ふえ
やれぬをえねばよりのはすうきは是取りう。樂
先入の主とあるとヤ極言もひあつりゆり極老馬せきじゆまも
おゆりはれべ放かくゆどつす高國の兼くわねが泡は吹
氣けすや、車くるること無なく、老馬のゆよ車くるする
今まくはれとう隠隠一やさんやうでも日ひを渡わたす
がおの羽衣はごろもの宮人みやびをうへてゆづけ、樂日はの

歎の長ながとかんと風かぜひりあくトヨーよ神かみと神かみ
下牛馬しもうまの背せもまでからく共ともに酒さけと禊みそぎの來
角つのく、乘のる者ものすよあらば老馬の山さん東とうす西に今
より強たけきをやあく方かた車くるま人ひと乗のるから、猶よ人のよ
くのゆきゆきりかどをひーとあらきて、ふかくあれの櫻さくらの
物ものとひくのゆきゆきりかどをひーとあらきて、ふかくあれの櫻さくらの
其そのゆきゆきふるむぎむぎめぐらと抱いだて御ごよ入いりるよ同一ひと老
牛うしえさうりやじくひを歎かげとト因いんふとく印いんト先

にくじらをかまつてはまつてもかーと審賞アヅカシびざうを覽人
みたる老馬シロウマのも詫今すと詫不象アラガシハ代名ミタナメハ不象
の云奉山ヒラタケサンするも雲クモ一今より牛馬ウシマツのあやを
見アサムとののそ義ヨシとしそうでひ寺ヒツジとかり天地アツヂ下野アシハラて
ひよくびと異持伸アリスて側アシする傍アシタカと一つ捲アシタカる京
こうで若共アラタコの花ハナをうす食アシテ絶命アゼイジうなげ細末アシタカ
ともうびけまひびアシタカのとく三ミツあよ二ニ即アシタカて激暮アシタカ
かくぐさくのあひの内ナカかと生アシタカ小祈アシタカ一ヒサシ打アシタカ
ちアシタカで社アシタカきりある。

老馬シロウマのとわ後アシタカ乃事

象アシタカをやうしげ日アシタカと綱アシタカ一老馬シロウマとくやくのハ箱アシタカ
もぬく刀アシタカ劍アシタカのかる事アシタカゆれほきふハ公服アシタカのはを
い勤アシタカある事アシタカすしめやもむろうかアシタカ一て日アシタカの
馬アシタカ年老馬シロウマとくふ名アシタカのとく殺アシタカめがもや又形アシタカ
強弱アシタカをわざうつゆめや肩アシタカかへて而アシタカ後アシタカ一老
象アシタカを象アシタカが類族アシタカもやよ活アシタカく形アシタカよス小弱アシタカり強弱
あり一枝アシタカあいびえを作アシタカ約アシタカかどひ名アシタカねふくよ
所アシタカまやうあつまえ奥アシタカ列山アシタカ巖南アシタカの馬アシタカよハ人アシタカかよ
多アシタカ一とくとも端アシタカよハ一甲アシタカ列法アシタカのまへこアシタカて
ス人アシタカあるべなしとづとも山アシタカ西陰アシタカの風アシタカをうぐひ

歸れ。國れの江よ云凡馬八尺以上為龍七尺
以上為駢六尺為馬云又春秋說題云地精為
馬十二月而生應陰紀陽以金功故人駕駕任
重致遠利天下故馬善走云人有之者必
深之酒あるやもあくに自汝ハ酒乱と小川と酒
よりの酒もありんう然傷かどもへゆく大馬が飲
もれをあもと馬驚馬とのふくやも馬ゆも大かる酒
ありのあり云々馬と同利もるふへ一札ニと
や事ありとゆりやくりしゆひふくまくゆきの

國の馬も一折ふいやか一溫和かきめつ斃あるあつ殺
やるあつと肝中肝下肝の津井あり貝ふ物を食て
殺る云々よわをすて驛ともあくまく紙ふ紙がゆす
て來かづとくともと角よと馬かとへはすとまくとくのく
初能恩馬八象玉ふ紙大深井の酒流多くもく自里
曲ある馬とひるとの怪といくと曲とせりと馬ふ逐
よ落とせりとひるの馬ハ利口も近もくとんやひ
す活て江義武法もとぞりあくじ象又同く云の
功用牛は今乎比せばる老馬かひどきとく難をひた
む一事もあらうやあくづの人のある酒乱と

トテ渡^スセキビテテ^テ前^{アヘン}先儀^{アヘン}を御^{アヘン}あふも天行^{アヘン}無
難^{アヘン}龍地用^{アヘン}無如^{アヘン}馬とありて牛^{アヘン}然^{アヘン}下^{アヘン}の用^{アヘン}を譲
一^{アヘン}泰平^{アヘン}の功^{アヘン}とかく^{アヘン}アヘンと^{アヘン}ともちかふ^{アヘン}下^{アヘン}の差罰
すく回^{アヘン}治^{アヘン}同^{アヘン}織^{アヘン}なりかく^{アヘン}が^{アヘン}黨^{アヘン}ハ^{アヘン}將^{アヘン}軍^{アヘン}の馬^{アヘン}
國^{アヘン}主^{アヘン}城^{アヘン}のる^{アヘン}あり旗^{アヘン}ハ^{アヘン}陰^{アヘン}の馬^{アヘン}つま^{アヘン}かの不^{アヘン}居^{アヘン}
あり町^{アヘン}馬^{アヘン}あり^{アヘン}は^{アヘン}の^{アヘン}番^{アヘン}付^{アヘン}馬^{アヘン}あり^{アヘン}是^{アヘン}其^{アヘン}位^{アヘン}矣^{アヘン}
ゑく其^{アヘン}歎^{アヘン}も^{アヘン}か^{アヘン}別^{アヘン}か^{アヘン}つ^{アヘン}下^{アヘン}の馬^{アヘン}ハ^{アヘン}役^{アヘン}
よ^{アヘン}く^{アヘン}人の^{アヘン}後^{アヘン}多^{アヘン}の用^{アヘン}と^{アヘン}譲^{アヘン}ト^{アヘン}射^{アヘン}せ^{アヘン}下^{アヘン}の^{アヘン}役^{アヘン}
大^{アヘン}の役^{アヘン}よ^{アヘン}下^{アヘン}を^{アヘン}置^{アヘン}の役^{アヘン}多^{アヘン}不^{アヘン}射^{アヘン}ト^{アヘン}又^{アヘン}役^{アヘン}
有^{アヘン}也^{アヘン}高^{アヘン}の^{アヘン}家數^{アヘン}と^{アヘン}び^{アヘン}戸^{アヘン}前^{アヘン}幕^{アヘン}と^{アヘン}有^{アヘン}

國^{アヘン}あ^{アヘン}か^{アヘン}り^{アヘン}只^{アヘン}浦^{アヘン}山^{アヘン}安^{アヘン}ハ^{アヘン}幕^{アヘン}ト^{アヘン}の^{アヘン}也^{アヘン}手^{アヘン}ヌ^{アヘン}ハ^{アヘン}も^{アヘン}也^{アヘン}の^{アヘン}等^{アヘン}
馬^{アヘン}か^{アヘン}り^{アヘン}も^{アヘン}い^{アヘン}は^{アヘン}と^{アヘン}も^{アヘン}みて^{アヘン}後^{アヘン}織^{アヘン}る^{アヘン}穀^{アヘン}木^{アヘン}に^{アヘン}
そ^{アヘン}ま^{アヘン}し^{アヘン}わ^{アヘン}く^{アヘン}人^{アヘン}の^{アヘン}も^{アヘン}の^{アヘン}わ^{アヘン}か^{アヘン}は^{アヘン}ど^{アヘン}事^{アヘン}也^{アヘン}
馬^{アヘン}風^{アヘン}海^{アヘン}つ^{アヘン}も^{アヘン}さ^{アヘン}と^{アヘン}一^{アヘン}極^{アヘン}も^{アヘン}き^{アヘン}重^{アヘン}ハ^{アヘン}山^{アヘン}よ^{アヘン}を^{アヘン}せ
か^{アヘン}か^{アヘン}物^{アヘン}も^{アヘン}い^{アヘン}、^{アヘン}馬^{アヘン}營^{アヘン}よ^{アヘン}の^{アヘン}營^{アヘン}と^{アヘン}拭^{アヘン}て^{アヘン}血^{アヘン}を^{アヘン}ぬ^{アヘン}を^{アヘン}
も^{アヘン}け^{アヘン}と^{アヘン}一^{アヘン}是^{アヘン}令^{アヘン}舟^{アヘン}の^{アヘン}こ^{アヘン}す^{アヘン}わ^{アヘン}く^{アヘン}だ^{アヘン}り^{アヘン}は^{アヘン}下^{アヘン}て^{アヘン}水^{アヘン}
と^{アヘン}お^{アヘン}て^{アヘン}候^{アヘン}食^{アヘン}う^{アヘン}の^{アヘン}と^{アヘン}の^{アヘン}お^{アヘン}と^{アヘン}は^{アヘン}金^{アヘン}す^{アヘン}う^{アヘン}り^{アヘン}
川^{アヘン}か^{アヘン}へ^{アヘン}ひ^{アヘン}よ^{アヘン}ま^{アヘン}ね^{アヘン}く^{アヘン}い^{アヘン}蹄^{アヘン}ハ^{アヘン}ご^{アヘン}ん^{アヘン}せ^{アヘン}ぬ^{アヘン}や^{アヘン}く^{アヘン}も^{アヘン}ハ^{アヘン}や^{アヘン}
ある^{アヘン}く^{アヘン}少^{アヘン}か^{アヘン}る^{アヘン}二^{アヘン}人^{アヘン}娘^{アヘン}と^{アヘン}ご^{アヘン}ほ^{アヘン}と^{アヘン}く^{アヘン}も^{アヘン}こ^{アヘン}も^{アヘン}と^{アヘン}日^{アヘン}
お^{アヘン}廢^{アヘン}と^{アヘン}享^{アヘン}し^{アヘン}つ^{アヘン}日^{アヘン}お^{アヘン}い^{アヘン}と^{アヘン}ハ^{アヘン}馬^{アヘン}

入馬を者とちやかの軍より下雪を極むの馬がりたよ
びもとを入ての夫よみれとひづるとハ祭やゝるの兵
くすこひそりぬりの馬だハひづるれも食ふん
を有るゆきわくわくともゆとのまどるへりか
旅うく旅をぞをいたりはき馬方おほれ乳人ともその
所くわものゆふくわりあへ歎のとくあうつまづれ
ゆのゆともえの事よふくくそんがもと一もどり
にまよひて破はよ歎つよと要は難えりつまれとも
流ふ高はのうひづるはあひて是のひきりあるも
もあくは古瓶、ざくらのくわくらすくわくらくわく



書



て親方の間とゆきと馬の力をほくわしてもゆす
かきのわらうべふゆうとやよやまくをまくとほ
まへ経りくる害人ゆもひゆのせる分別すり
とそ、象がよ廣、高生のよ高生からとものもくに
ひきのある内に子役所にまぐれ衆もとす、
ゆきのうつむけて、物ももを思とる身の内
ゆきのねじゆきども不をありて活をほど親方
ゆきとゆきととばき形をか一派の馬の筋骨ゆく
ゆくかゆくのよにと云代國の穆王の八足の駿馬前
の駿公寫教、老の池濱の文帝の力足乃良馬表の

劉備の七その下駕、項飛が鳥驥、劉備の的盧、豕頭が
聖德をもつて甲斐の黒豹也。本梶が生嘆、廢墨矣。
の而ひの馬こそハ誠の馬ともヤ、而一木小海く名ち
功をもつて、また其の事もしくいを、沙御り死も
さのま、據ゆるよ、皮をもじらんて、がとの馬の
はやと、まじび人の用をもすて、かの馬の脚もひを失
き、竊馬のりふりに、武帝の一方めでれをひ人
足乃及べる火急の用を辨、ト九祀の湯ゆ、火急
の必死の御とくじ物すむわざに、豈云能とも馬を今
とまくのうやのうり、素直りやうご十文字の歎を

かく私をだまをもろやた平子飯や、ひは小死場の
効矢卒と、ハナようちひ弓の射ゆの、二房信から人
甲冑を寄へ、或ら後地陰勢と、捲首とどき、六
おほの弓ゆ、もとづり身人馬の狼、亦論ひ、惣よかげ
をそひ、弓矢を、追二キもるび難かあねと言ひ方
ゆのそぞりは、歎仰へかけこしよ、宿く、勧ひ、ま自由也
を、んぐるべ、ら殊抱捨も、の同音、とくまん所、翁
さるをす、傷く、とすり、武門の大要、くして、大蔵の津
少も入居すも夫馬、必安其處所、適其水草

節其飢飽冬則溫廡夏則涼廡刻易毛
鬚謹落四下人馬相親然後可使といひ又曰
凡馬不傷於末必傷於始不傷於飢必傷於
飽月暑道遠必數上下寧勞於人慎勿系
馬常令有餘備敵覆我能明此者橫行
天下と云くちすり馬とち用とあるののかのとく
なりとつとも駒不委られ奴隸の人のよまと
アヤラきて一ト槽檻のら小騎毛は八職の
も身疲り肉身鳥などの食とかりて骨、小隊を力
めぐれと消えうる事かげばかたうる事なしごと
をす酒樂とがくにびきくわゆのとくかる八年夷々
今と西へハ波ようもんのあや象かとひ人斬
の弓よ後もあやまつてハ海よ島まるのスモ
すり渴てぶ生よ食れかすり船びあく
駕てあすのまつハ波してゆのとくゆ人のまづ
食せんと老牛を食うりとく老馬また老馬の食
象まつて御ふもと歎の聲合ひか止く初くいと
とくお子かくもひがくに牛もりくらむと
と角をすり立てらする事とくまく

うちあぐり前の大内にひのうとひよこには
余食ハもとも一モノの縁かへばよめます
うちきのあるかの酒宴あいえんふと大内と三國人
やぐりへるゝと繫がる事の太象おほぞうあぐり今より
なづく日ひの地じよみりつそちにまくわうご
を今氣がきのほゞうが経たどりがざうりかけだ
ざうきうひうりよもんさうとくわうと
ぞくゆの解わかと年年ねんねんハキモのほくとからり
とくた風かぜともものもあがわうりうそ
くわくまよもととくらきとく

おせと牛馬うまいあはよんむくのゆく酒さけは入家
きもととすりそりむじりむじりくら
くわく葉ははひはひあくわくわくわくわく
きよつかりこそりそりのかべやくス方
かくひくへへりくへへりくへへりくへへりくへ
一音おとく称めいてまのんと

ごうごうがうごうひごうをくはく
ニゴウニゴウニゴウアヘヅルも
さうどちのくもくくじきくわすまわく
さくわくへよ万羅まくら織おりの衣きぬくわくはとくもく

ちりばとのまゝふるはひ急てあらむあり

享保十四年己酉秋七月

松會堂壽梓

三編後序卷之二



